

日独通訳者養成プログラムについて

2004年度もまた日独通訳者養成プログラムをDESKの活動の一環として継続させていただいた。本プログラムは、このNewsletterのNo.5およびNo.6でも触れたように、2002年度から開始されたもので、二つの目標を掲げている。一つは、実際に活動できる優秀な日独両言語間の通訳者を養成することであり、今ひとつは、実際の通訳者養成教育を通して、通訳者養成に必要なノウハウを蓄積し、今後の教育コンセプトを作っていくことである。2004年度もまたそのために、現役日独会議通訳者である桑折千恵子氏、蔵原順子氏、さらに吉村謙輔氏という最高のスタッフの協力を得て活動を継続することができた。ここに参加している「受講生」たちは、既に折に触れて会議通訳や商談通訳をしている若手通訳者たちに加え、東京大学・東京外国語大学などの学生・卒業生を加えた混成チームであるが、ドイツ連邦共和国大使館の日本人スタッフといったハイレベルの参加者たちもしばしば加わって、通訳の実践練習およびその批判的検討を定期的に重ねてきた。

2004年度も、東京大学駒場キャンパスにおける毎月最終日曜日(13時~18時)の定例会を中心に活動を続けた。そこではドイツ語の講演テープをもとにした日本語への通訳練習を中心に、日本語テキストのドイツ語への翻訳練習、ドイツ語でのスピーチや模擬討論などといったメニューをこなしていった。加えて、毎年恒例のブロックゼミナールも開催したが、今年はティーチング・スタッフの日程的都合により、夏の一回しか合宿セミナーを行えなかったのは残念であった。このブロックゼミナールは9月18日~20日の2泊3日で、例年のようにつくば市の産業総合研究所、テクノ・グロースハウスで開催させていただいた。産業総合研究所においても人事異動があり、この巨大なテクノロジー研究所で私たちの日独通訳者養成プログラムが実施されるというのは全く自明のことではないにもかかわらず、新たに所長となられた大見孝吉氏のお力添えのおかげもあって、通訳者養成にとってまたとない施設を今回もまた引き続き快くお貸しただけのこととなった。この場をお借りして大見氏および事務スタッフの皆様、心より感謝を申しあげたい。

さて、総勢22名の参加者による2004年

夏合宿のプログラムは、その大見氏によるご挨拶を既に通訳養成用の教材として活用することから始まった。メインプログラムは産業総合研究所「近接場光応用工学研究センター」にドイツのForschungszentrum Jülich から派遣されている光学研究者Carsten Rockstuhl氏によるTheoretische Untersuchungen der Interaktion von Licht mit Materie(光と物質の干渉に関する理論研究)と題された講演であり、参加者たちはこれを逐次通訳し、その内容について、また通訳のあり方について、活発な討論を行なった。通訳者にとっては、日常的に接することのない特殊なテーマをいかに破綻なく理解し訳すかが大きな課題となるわけであるが、事前の資料の予習が行き届いていた成果もあってか、専門的内容にもかかわらずおおむね破綻なく訳出ができ、参加者には貴重な体験となったと思われる。

翌19日には、吉村氏を迎え、ソニーの盛田昭夫前会長の対談などの素材を使った日本語からドイツ語への通訳練習を行った。さらに午後には、ドイツ連邦共和国の新大統領となったHorst Köhler氏の就任受諾演説について原稿を事前に訳出しておく宿題が出されていたのを受け、それをもとに、いかなる誤訳や理解不足が生じやすいかをパターン化するという「間違いのデータベース化」の例証を相澤が行ない、さらに筑波大学のHerrad Heselhaus氏に、Köhler大統領に関する別のテキストを用いながら文体に関する練習とレクチャーをしていただいた。筑波での合宿セミナーは既に5回目ということもあり、2泊3日の短い期間とは思えぬほど充実したトレーニングと討論を行うことができたと考えている。

なお、当初予定していた2004年度後半の合宿セミナーは既に述べた理由で中止せざるを得なかったが、その代わりとして3月の最後の月例会は通常より長時間のものとし、特別ゲストとして法律専門家のChristoph Hendricks氏を招いて日独の選挙制度の相違点に関する講演を行って頂き、これも逐次通訳した上でビデオチェックによる反省会を行った。

これらの活動を通じて、各参加者には貴重な通訳訓練の場を提供することができたと考えているが、私たちティーチング・スタッフもまた、さまざまな通訳上のトラブルの実例や問題点に接し、ど

のような訓練によりいかなる改善が図れるのかを考える教授法上の機会を得ることができた。そうした中で私たちは、このDESK通訳養成プログラムを中心に、今後、「間違いのデータベース化」の作業を進めることで、失敗を通じて学ぶための方法と素材を提供し、さらには、通常の独和辞典でカバーされていない語彙に関する訳語辞典のデータベース化などの作業も立ち上げてゆきたいと考えている。もとよりこれらの作業には膨大な作業とコストが予想されるため、DESKだけでなくさらなる外部資金を得られる道をも模索しながら、じっくりと作業を進めてゆかざるを得ないが、今後そうした方向でこの通訳者養成プログラムから、プログラムのメンバーのみならず日独間の通訳・翻訳に携わる人々にとって広く役に立つ知的データベースが将来的に構築できてゆくならば、きわめて有意義であろうと考えている。2005年度も、定例会やブロックゼミナールを続ける中で、そうした将来的展望に基づく企画も、少しずつ前進させて形にしてゆきたいと考えている。

相澤 啓一 Aizawa, Keiichi
(筑波大学)

